

遠景近景

十一月の祝日の朝、目を覚ました四歳の娘を抱っこすると、体が熱いの気づきまし。熱を測ると三十九度。あわてて休日応急診療センターに駆け込みました。新型インフルエンザが猛威をふるっている時期、待合室は患者であふれていましたが、診察を終え薬をもらうまで一時間程と予想以上にスムーズでした。

こうした地域医療を支える

医師の不足が全国的に問題になっていきます。その一因が二〇〇四年に始まった新臨床研修制度にあると言われます。

以前は卒業した大学の附属病院での研修が慣例化していましたが、新制度では研修先を全国の病院から選べるようになりまし。結果、新人医師

の都会志向を受け、地方の大学病院は貴重な労働力である研修医を確保できず、人手不足を補うため、関連病院に向していた医師を呼び戻す。その関連病院が人手不足となり、地域医療に影響が出る。負の連鎖を呼んでいます。そんな中、和歌山県立医科

未来の地域医療を守る

和医大以外の学生です。人気の秘密は自由に選べる研修プログラムにあります。他病院は内科や外科から回ることが多いようですが、和医大は好きな科から選べます。研修医の自主性を尊重することで意欲的に取り組んでもらえる訳です。また、先進的な

門性を備えた医師を育てるのが理想。この二つがあれば高度医療、救急医療、地域医療が安定する」と話します。研修医の多くは研修期間の二年間のうち、三カ月から半年程度、大学を出て公立那賀病院や橋本市市民病院など地域の病院で過ごします。「二年目の研修医は十分戦力になるし、現場での経験は本人の能力アップにつながる」と上野

センター長。二年の研修後も多くは和医大に残っています。新人医師たちが第一歩を踏み出す場に和医大を選択してくれていることは、未来の地域医療にとって明るい材料です。県民の安心を守る和医大の取り組みは、今のところ順調と言えます。 (西山)

大学附属病院が地方の大学病院ながら新人医師の人気を集め、注目されています。同病院が受け入れた研修医は、新制度導入初年度の〇四年が三十二人で、以降はほぼ毎年増え、今年には五十六人でした。来年四月からの希望者は六十一人と過去最高。うち三十六人は

医療設備を備え、高度な医療技術を学べる一方、市民病院としての側面を持つため、患者とコミュニケーションを取りながら軽度の病気やけがに対応する経験も積めます。和医大卒業後臨床研修センターの上野雅巳センター長は「幅広い疾患をみられ、かつ高い専

業